

## 子どもに与える童話の影響



石 森 延 男

幼い時にきいた感動深いお話は、だれにとっても、一生の宝ではないでしょうか。

日のあたる縁側で、おばあさんがぼつりぼつり語ってくれた昔ばなし。おとうさんの膝のなかに、とつぷりとおさまって、読んでもらったお話。このようなお話―童話―は、子どもたちの心の成長に、どんな役目をはたしているでしょう。

すべてが機械化されていこうとする今日の社会では、子どもたちまで、なんでも、ほんとうか、うそかを割り切ってしまうたがりまです。はつきりと証明できないことがらは、みんなうそときめつけてしまう傾向さえあります。こんな時代にこそ、童話が子どもの心に、どのような影響をあたえるか、という問題について、もういちど考えてみるのも、意味のあることと思います。

そこでわたしは、次の六つほどのことを考えています。

### (1) 子どもによるこびと興味をあたえる

子どもたちは、ただの説明的な話をしてもらったのしんで聞いてくれます。ところが、童話の世界では、すべてのものが、たとえば石でも、草でも、雲でも、すべて生きものとしての相互関係をもっています。無生物でも人間と同じように呼吸しているようにとり扱われます。ですから、ただの説明的なお話やことばだけでは求めることのできない、同情心とか正義感とかが含まれています。子どもたちは、こうした童話において、日常生活のなかでは、とうてい得ることのできない、深い人間的経験を見出すこととなります。それだからこそ、ぐんぐんと童話の世界にひきこまれ、自分が主人公になつたような気持で同化してしまうのです。これが、童話の子どもによるこびとを与える秘密であり、本当の意味での興味なのです。

### (2) 想像力をのばす

前述したように、擬人化という童話の世界では、現実におこりえないさまじまなことが展開されていきます。魔法使いがほうきに乗ってやってくることもあろう、樹木がふいに話しかけることもあろう、けものが得意になって歌い、魚が涙をながして悲しみ、星が懐しげに招いている……。たとえどんな変った世界であろうと、子どもたちはたやすく入りこめるだけの性質もっています。すべてのものが生きていると、自分と同じ位置にたつて考えることができるのです。

幼い時代には、できるだけ科学的な観念や、形の上の知識だけでなく、これをのりこえて、限らない自由な想像世界へ、童話がその案内者となるようにしたいものです。想像力の乏しさが、わたしたちの精神生活を、どんなに味気ないものにするか考えてください。

先年、「赤い風船」というフランス映画が、封切られたことがありました。パリの街を背景に、一人の少年と、赤い風船の友情を描いたのですが、ファンタジーにあふれた、いかにも豊かな作品でした。わたしは、さっそく見にでかけました。そのとき、映画館のなかで、すぐ後の席に座っていた、二人の若い女の人の話し声がかきこえたのです。画面は、学校にいこうとして、電車に乗った少年を、赤い風船が、白いひものしっぽをぶらんぶらんさせながらついていくシーン。

「あらいやだ、あんなことって、あるかしら。」  
こうささやくその人のことばを聞いて、わたしはがっかりしまし

た。むしろ、なんだかわいそうに思われてきました。きっと、この若い女の人たちは、子どものときから、想像の世界にひたつて楽しむという心もちを、もたなかったのでしょうか。想像力を失なわないうでおとなになることは、むずかしいかもしれせん。とくに今日のようなメカニズムの時代は、しかし、こんな時代だからこそ、いっそう豊かな想像力が望まれるのではないのでしょうか。そのためには、なにごととも素直に感じて、受けとめることのできるたくましい想像の翼を育てておくことが必要です。童話を話してきかせることは、ちょうど、子どもに精神的保険をかけてやることになる、といってもいいすぎではないでしょう。

### (3) ものをみる力が高まる

子どもたちは、毎日の生活のなかで、自分の周囲にあるものについて、いろいろの疑問を持つものです。そうして、それを自分なりに解決しようとするものです。そのために、ときにはうるさいほどの質問を、その親なり、保母なりにあびせます。もしその時満足な答が得られないと、どこまでも食いさがっていきます。そんな時、「うるさいね。」と一言のもとにかたづけてしまわないようにしたいものです。疑問をたずねるこの態度こそ、やがては真を求め、善を願い、美にあこがれる心の芽だからであります。童話は、こういった子どもの求知心を、しらすしらすのうちに、満足させつつ高めていくものであります。それは、物語のなかから、とうりいっぺんの勸善懲惡の思想とか、公式的な原因結果の関係を、理解させるこ

ことではありません。どんな小さな動物の世界でも、そのなかには、愛もあり、憎しみもありましょう、悲劇もあり、喜劇も演ぜられていますが、運命的な圧力をはねかえそうとする、人間の意志や、生と死の問題——童話のファンタジイは、このような問題を、いろいろにとりあげて、それなりに解決していきます。

そうして童話のなかに再表現された、人間界、自然界のいろいろな事件や現象を、子どもたちは、自分の知恵や道理で、いくらかずつでも解いていき、自分の観察が足りなかった点を発見し、日常生活で見聞きしたものを、童話のなかで再び経験する。こうしたことが、子どもたちの知性や観察力を、しぜんに鋭くさせていきます。

また、童話を読んであるあいだ、子どもはただ、その表面的なおもしろさのみにひかれていくかもしれません。が、その奥にひそんでいる、文学的意味を、すっかり理解しないにしても、子どもらしい直感で感じるでしょう。

このように童話は、全体をまとめてながめる力、感じる力を育てるとともに、ものごとの表面だけをみて判断するのではなく、立体的に見とおす力を、おのずから成長させるものだと思います。

#### (4) 社会生活への関心が深まる

童話の世界というものは、登場人物（それが人であれ、けものであれ）と、それをとりまく他のものとの間に、ちゃんと、秩序だてられています。その人物の背景や、まわりのものの立場とのつながりが、明らかにされています。そこには、大なり小なり、社会的関

係が描かれているのです。なぜ、この人たちが、生きものが結ばれているのか、どんな目的のために団結しているのか、といったようなことが、おたがいの立場からとり扱われています。このような、ひとつの社会風景をながめることによって、子どもたちは、しぜんに自分の社会的立場に意識をむけるようになってきます。ある童話のなかに入りこんで、「もし自分が、こんな社会の一員だったら」という意識をおこさないでしょうか。そうして「こんな時、自分だったらこうする。」とか、「こうすべきだ。」とかいう、判断や、批判の気持をいだくようになるでしょう。

多くの童話を、きかされたり、読んだりしていくうちに、社会といるものが、ただの利害関係でつながっている面を、鋭くみつけていくことにもなりましょう。そうしてやがては、こんな利害関係だけで、結ばれていない真の社会的関係のあることも、発見するにちがひありません。

#### (5) 同情心をそだてる

童話には、さまざまな境遇の主人公があらわれます。魔法にかかれて、姿をかえられてしまった人や、とらえられたり、自由をうばわれた動物たち、不幸な虫や草木たちが登場します。追いつめられるもの、苦しみ悩むもの、善良な心のもち主であればあるほど、迫害されるものもあります。このような内容をもった童話に接した子どもたちは、あたかもその境遇が現実にあるかのように思っ、じっとしていられない気持になるものです。そうして、なんとかし

てなくきめてあげたい、元気づけてあげたい、助けてあげたいと思  
い、ときには、義憤さえ感じてきます。弱いものに対する同情の念  
が、強いものに対する一種の反抗心が、犠牲的精神の芽ばえが生じ  
てきましょう。こうして、童話のなかの登場人物が、同情心の対象  
となり、道義心をやしなうきっかけとなるのです。つまり童話は、  
いわずかたらずのうちに、人間性の地盤を築いているということが  
いえます。

#### (6) 美意識を高める

童話は、種々の芸術的美に満ちています。ギリシャ神話にせよ、  
アンデルセンやグリムにせよ、それぞれに特有の美しさをもってい  
ます。まるで、いろいろな花の咲きみだれた野原のような童話の世  
界です。ですから、この園に出入りする子どもたちの心に、美意識  
が育たないほうが、むしろ不思議なくらいです。

また、童話には、みにくいもの、きたない場面が描かれる場合  
も、かなり多くあります。これは、われわれのなかにあるものの、  
一面をとりだして見せた象徴かもしれません。また、その時代の恐  
怖的観念を具象化したものかもしれません。いずれにしても、子ど  
もたちが、このような醜い登場者であったとき、または、汚い社  
会に目をむけたとき、それらのものにおそわれる恐ろしさ、不快さ  
に悩まされるにちがいありません。けれども、そのことのために、  
かえって明るさを求めてくるようになります。清いものへのあこが  
れが強まってきます。逆説的な言い方かもしれませんが、醜

さが激しければ激しいほど、光明を望み、美しさを願う心が燃えた  
つのではないでしょうか。子どもとは、そうした逞しさをちゃんと  
備えている、すばらしい生命体ですから。

こう考えてくると、童話のなかに、醜悪なものが存在すること  
が、かならずしも悪影響を与えるものとは、いえなくります。と  
きには、美意識をめざめさせる、ひとつの手がかりともなると思っ  
たのです。

× × ×

童話が子どもたちに与える影響について、いくつかならべてみま  
した。

それぞれの子どものたちの、年齢や性格に合った、よい童話をあた  
えることが、人間形成のうえに、どんなに大きな役目を果たしてい  
るかを、多少とも分つてもらったかと思えます。

日本の童話、特に創作童話は、まだ歴史も浅く、西欧にくらべる  
と、文学としての地位も確定しているというわけではありません。  
これから発展していくべき、若い分野なのです。子どもたちのため  
に、みんなで、新しい、いい童話をどんどん発表していこうではあ  
りませんか。

\* \* \* \* \*